杉田玄白『蘭学事始』における学問論

Theory of Study in Sugita Genpaku's *Rangaku Kotohajime*

笠井　哲

福島工業高等専門学校一般教科

Akira Kasai

Fukushima National College of Technology, Department of General Education

（2010年9月17日受理）

In *Rangaku Kotohajime*, Sugita Genpaku looks back on his own life, starting from the origin of the Dutch studies and focusing on the translation and the publication of *Kaitai Shinsho*. Genpaku wrote about the people who proposed new study called Dutch studies and advocated Dutch medicine at a time when people only believed in Chinese classics and Chinese medicine.

The purpose of this paper is to consider Genpaku's theory of study, paying attention to how he found problems and solve them in *Rangaku Kotohajime*.

Key words: Sugita Genpaku, *Rangaku Kotohajime*, Dutch medicine, Dutch studies, theory of study

1. はじめに

杉田玄白（1733～1817）は、『蘭学事始』で、蘭学の起源から始め『解体新書』の翻訳事業・出版を中心に自らの人生を振り返っている。そこには、漢学と漢方医学一点張りの世にあって、「蘭学」という新学問を提唱し、「蘭方医学」を標榜した一群の人びとの歩みが綴られている。

『蘭学事始』は、その末尾に記されている通り、玄白が弟子の大槻玄沢に原稿を託して、推敲させたものである。したがって、玄沢による加筆部分もあるはずであるが、どのあたりがそうであるのか不明である。いずれにせよ、大槻玄沢によってまとめられた『蘭学事始』は、その後、世代を超えて何人もの蘭学者の手に渡り読み継がれてきたようである。

実は、この書は江戸時代に印刷されたことがなく、広まっていたのはすべて写本であった[1)]。写本は、一冊一冊別々にそれぞれ別人が書き写した書物である。写し間違いや書き換えがあるのが当然であり、そのため今日には、十数種類もの微妙に異なる『蘭学事始』が伝えられている。

この場合、いずれが最も優れた写本であるかは、専門家たちの間でも断定できない。今日、出版されているいくつかの『蘭学事始』でも、元にしている写本が異なるため、わずかな言葉の相違が散見される。しかしそこに、内容が大きく異なるような差はないので、本稿では問題にしない。

『蘭学事始』が初めて刊本となったのは、明治２年（1869）である。そのきっかけを作ったのは、福沢諭吉であった。幕末のある日の夜、神田孝平という福沢の知人が、露店で偶然にも『蘭学事始』の写本を見つけた。この書ができてからすでに50年を超え、もはやタイトルのみが伝わる幻の書であった。

神田は、この発見を喜び、早速購入すると友人同士で写本を数冊作り、皆で読みあった。福沢もこの機会に初めて『蘭学事始』を読んで、感動したことがよく知られている[2)]。

福沢は、『蘭学事始』を数冊の写本のまま終わらせるのは惜しいと考え、これを印刷する計画を思い立った。そこで福沢は、玄白の子孫である杉田廉卿に出版を勧め、資金面の援助もした。こうして、明治２年、『蘭学事始』は、初めて出版されたのである。

本稿の目的は、杉田玄白が『蘭学事始』において、如何にして問題を発見し、どのように解決したのかに注目し、彼の学問論について考察することである。

2. 学問への志

明和３年（1766）春、杉田玄白はそれまで付き合いのなかった豊前中津藩の医者・前野良沢の訪問をうけ、誘われるまま連れ立って長崎屋に出かけた。大通詞・西善三郎に会うためである。オランダ語を学びたいという二人の望みを聞いた善三郎は、即座にやめた方がいいと具体例を示しながら理由を述べた。

「それは必ず、お止めになった方がいいでしょう。なぜかというならば、オランダ語をならって理解するというのは、とても難しいことだからなのです。例えば、湯水や酒を『飲む』ということを尋ねようとする時には、最初は手まねで問うより他に、仕方がありません」（p. 22）[3]。

前野良沢のオランダ語学習の申し出に対し、善三郎はこのようにその困難の程を述べ、さらに抽象名詞や動作の表現の困難性を強調し、その挙を思い止まらせるべく意見した。

善三郎の意見を良沢と玄白の両人は、如何に受け止めたのであろうか。この受け止め方によって、良沢と玄白両人の、その後の歩みが大きく変わってくる。大げさな言い方をするならば、その後の両人の人生が大きく変わっていくように思われる。

玄白は、「良沢はこの忠告をどのように聞いたかは知らないが、私は生まれつきせっかちなので、その説をもっともなことだと聞いて、そのように面倒なことをなしとげる根気はないし、そういうことでいたずらに日月を費やすのは無益なことだと思い、無理をしてまで学ぶ気持ちもなくして帰った」（p. 23）とあるところから判断するに、オランダ語の学習をあっさり断念してしまったようである。

一方、前野良沢には、この西善三郎の言葉はどう響いたのであろうか。かねてからオランダ語を読み出したいと考えていた良沢にとって、善三郎の言葉は確かに強い衝撃であったが、さりとてあっさり断念できるようなことではなかったようである。誘いを受けて随行した玄白に比べて、自ら進んで同業の士玄白を誘って長崎屋へ面談に出かけた良沢の心には、きついものがあった。そうであればこそ、やがて数年後には一大決心をして長崎遊学を実行する。彼の心の内に、強固なものが籠もっていたことは見逃せない。

杉田玄白は、その後オランダの学問について、平賀源内と次のように語りあっていたという。「だんだん見聞をかさねてみると、オランダの実測・窮理の学問は感心することばかりである。もしオランダの書物を直接翻訳してみることができるならば、ことのほか利益を得ることはまちがいない。けれども、これまでに、そのことについて志をたてた人のいなかったことは口惜しいことである。何とかしてこの道を切り開く方法はないだろうか。江戸などではとてもできないことである。長崎の通詞に委託して、翻訳させたいものである。一冊の書物でもその仕事が完成したならば、大きな国家利益ともなるであろう」（p. 31）。とはいっても、その度に翻訳の仕事をなしえないのを嘆いていたのだった。しかし、何も長崎の通詞に頼まなくてもよい。前野良沢の力を借りれば、今自分たちでもできるのではないかと玄白はふと考えた。そこで、次のようにいったという。

「何とかして、この『ターヘル・アナトミア』の一部分でも新たに翻訳したならば、身体の内外のことも明確となって、今日の治療の上にも大きな利益となるであろう。何とかして通詞たちの手を借りずに、読み解きたいものである」（p. 37）。良沢も、「自分は、かねがね蘭書を読みはじめたいと念願していたけれども、これと志を同じくするいい友人がいなかった。いつもこのことを嘆き思うだけで日を送っていた。皆さん方がいよいよそうしようと希望されるならば、私は前年長崎へも行って、オランダ語も少しは記憶している。それを種にして、一緒に読みかかってみてはどうだろうか」（同前）といった。それを聞いた玄白は、「それは何よりも喜ばしいことである。同志で力を合わせて下さるならば、私も奮起して覚悟を決め、一つ精一杯頑張ってみよう」（同前）と答えた。良沢もたいへん喜んで、「それでは、善は急げ、という諺もある。早速明日、私の家へお集まり下さい。どのようにも工夫はあるだろう」（同前）とかたく約束してその日は別れた。

その翌日、明和８年（1771）３月５日、良沢の宿所に集まったメンバーのうち、オランダ語がわずかにできるのは、前野良沢一人である。杉田玄白をはじめとして、中川淳庵もオランダ語ができない。桂川甫周は、当初からメンバーに加わっていたか、間もなく加わったか判然としない。玄白が「最初より会合ありし」という、ほぼ会読の初めから参加した桂川も、オランダ語はできなかった。

『ターヘル・アナトミア』を会読するというからには、オランダ語の読解力が要求される。ここにおいて、杉田玄白・中川淳庵・桂川甫周の三人が、前野良沢からオランダ語の手ほどきを受けることになる。これが、

玄白のいう、良沢を「先生とも仰ぐ」という意味であった。オランダ語を教授し、学習するという点においては、先生と生徒、師弟の関係ということになる。

前野良沢は中津藩医、杉田玄白と中川淳庵は小浜藩医、桂川甫周は官医である。現代風にいえば、勤務先がそれぞれ異なる。四人の目的も、またまちまちである。良沢は、「普通の人とは違った才能の持ち主であったから、この学をもって一生の仕事と考え、オランダ語に通暁して、その力で西洋の事情を知り、あちらのたくさんの本を、何でも読むことができるようになりたいという大きな望みであったので、その目標とするところは、中国の康熙字典などのような辞典を理解したいということで、このことを深く心がけていた。それゆえ、世間のはでで軽々しい心の浮ついた人とは多く交際することを嫌っていた」（p. 45）という。

中川淳庵は、「かねてから物産に関する学問を好んでいたので、何とかしてこの蘭学を勉強して、海外の物産のことを究明したいと思っていた」（p. 46）という。桂川甫周は、「特にこれという目的があるというふうには見えなかったけれども、前にもいったような（父親がオランダ流外科の官医）家柄であったから、ただ何となく蘭学を好まれ、年は若いし、根気はいいし、会合のたびごとに出席され、この会読事業に参加された」（p. 47）という。

杉田玄白は、彼らと大いに異なっていた。「初めて解剖を見、オランダの解剖図と照らし合わせて、中国や日本の説と非常に違いがあることに驚き、何とかしてこのことだけでもはやく明白にさせて、治療に役立たせたいと思い、また世間の医者たちがいろいろな医術を発明する際にも、役立つようにしたいという希望だけであった」（同前）という。彼には、オランダ語を覚え他のことをしようという望みは、なかった。

3. 翻訳作業と会読の推進

さて、オランダ語の初歩が終わったところで、ようやく翻訳に取りかかることになった。「鼻」に関する以下の記述は、おそらく『蘭学事始』の中で最も有名な場面である。すなわち、ある日「鼻」のところで、「フルヘッヘンドしている」という箇所に至った。良沢が長崎から持ち帰った小冊子を参照すると、フルヘッヘンドの注釈に「木の枝を切り取れば、その跡がフルヘッヘンドをなし、また庭を掃除すれば、その塵土が集まってフルヘッヘンドする」（p. 39）とある。「これはどういう意味なのだろうか」（同前）と、またいつものようにこじつけて考えてみたが、わからなかった。その時、ふと玄白が思ったことは、「木の枝を切ったあと、切り口が堆くなる。また、掃除をして、塵や土が集まれば、これも堆くなる。鼻は顔のまん中にあって、堆くなっているものであるから、フルヘッヘンドとは堆ということであろう。ということであれば、この語は堆しと訳してはどうだろうか」（pp. 39－40）というとメンバーはこれを聞いて、「いかにももっともである。堆しと訳せば、ぴったりであろう」（p. 40）といって決定したという。しかし、「フルヘッヘンド」の語は、「鼻」の箇所にはない。この有名な話は、実は玄白の創作であったといえる。

とにかくこうして、意味を推し量ってきめた訳語の数も増え、良沢の単語ノートも、次第に補われていった。しかし、シンネン（精神）などいう抽象名詞が出てくると、いくら考えても見当がつかない。その時は、「これは行く行くわかる時も来るだろう。まず符号を付けておこう」（同前）として、丸の中に十文字を引き、轡十文字と呼び、宿題にした。

苦しさの余り申し合わせの宿題記号・轡十文字を付けながら、「精を研り、辛苦」（同前）の会は、一ヶ月に６～７回も催された。お互いに主君に仕える責任ある身であったから、一ヶ月に６～７回の会合はたいへんなことであった。会集すれば、熱中し日が暮れるまで考えるという時間のかかることであったから、少人数でなければうまくいくわけがない。というのも、翻訳作業と並行して、オランダ語の学習も相兼ねて事業を促進しようということであってみれば、足並みが揃わなければならなかったからである。

少人数ならば、会合の日取りの都合もつけやすい。いずれも、主家に仕える身の余業としてすることであってみれば、いっそうその間の事情を考慮にいれねばならない苦心があったと思われる。それにもかかわらず、玄白は会合開始から月に６～７回も参会し続け、１年もたつ頃には訳語も増し、翻訳も余程進行するようになったと述べている。してみると、やはり訳読作業開始後しばらくの間は、きわめて少人数で頑張り続けたと判断しなければならない。少数精鋭をもって難解な原書『ターヘル・アナトミア』に立ち向かった。

さて、翻訳事業を起こした玄白たちは、一ヶ月に６～７回も定日の会合を重ねた結果、当初無数に付けられた不明宿題記号・轡十文字も、およそ一年余も過ぎる頃には、訳語の増加と正反対に一つ減り二つ減った。「その文章や語句のまばらなところは、一日十行も、

それ以上も、各別の苦労もなく理解できるようにもなった」（同前）という。

事実この訳読の事業は、予想以上に早く進捗した模様で、一年半くらいも経った時には、もう一応の訳はできていたのである。辞書をはじめ、何かと不自由な当時にあって、これは驚嘆すべき早さである。その秘密はどこに、どのようにあったのであろうか。注目すべき点である。

このように、事業が短時日のうちに進捗した蔭には、実は杉田玄白の並々ならぬ努力が見られたのである。その努力を点検すると、次の２点に要約できそうである。すなわち、一つは翻訳メンバーについて、人選がよかったということである。二つは、運営が非常に巧妙であったことである。この２点で、非常に早く成果をあげることができたといえる。

会読の人は、それぞれ異なった目的を持っていて、性格もずいぶん違っていた。こういう多彩な人材を抱えたこの翻訳作業の面々を、杉田玄白は「社中」あるいは「同盟の人々」と呼んでいる。師弟関係をあらわす「塾」とか「師弟」とか「先生」という言い方とは区別している。上下関係ではなく、それぞれ独立した役割を持った平等な資格のメンバーである。そういう集団が、ああでもない、こうでもないと言って盛んに議論して、一つずつ訳語を決定していくという集団思考を続けたわけである。

こういう多彩な人材で構成されているこの会に、杉田玄白は、平賀源内を呼ばなかった。ここがたいへん注目すべき点である。平賀源内は知らない間柄ではない。それどころか、オランダ商館長一行が毎春東上し、江戸滞在期間中に、長崎屋によく行く常連のメンバーであった。その様子が『蘭学事始』の中に、生き生きと書き留められている（p. 27参照）。

源内は大そう起用で工夫のいい人であったようだ。ある年、カランスというカピタンが江戸参府で長崎屋に滞在したときのこと。人々が集まって酒宴になった折、カランスは戯れに口が知恵の輪になっている一つの袋を出して、これを開けることができたらその人にあげるといった。座客たちは、開けようといろいろと試みたが、誰も開けることができなかった。

末座にいた源内のところに、この袋がまわってくると、源内は手にとって暫く考えていたが、たちまちその口を開けてしまった。一座の客はいうに及ばず、カランスもその才能が敏であるのを感じて、直ちにその袋を源内に与えた。このときから甚だ親しくなって、たびたび長崎屋を訪問し、物産のことなどを尋ねたと伝えている。

もっともカランスの江戸参府は、明和元年（1764）、同３年、５年、６年の４回であった。カランスに出会ったとすれば、この４回のうち玄白もその席にいあわせた明和６年（1769）ということになる。

しかし、玄白はこのようによく知っている間柄の源内をこの訳読の会にあえて呼ばなかった。おそらく玄白は、たいへん苦労多く、根気を必要とすること必定のこの訳読作業を推進し、完成に導く大目的のためには、世に流行りたい心を持っている平賀源内を会に引き入れないことに、非常に苦心したと考えられる。普通は、引っ張ってくるのに苦心するが、この場合入れないことに苦心しているわけである。

なぜなら、この平賀源内のような人を会に引き入れて、交際嫌いで気難しい前野良沢と衝突させるということを、何としても避けたかったからだと思われる。語学力の点で先生とも名手とも仰ぐ、気難しい前野良沢との衝突を、絶対避けるべく玄白がとった賢明な方法であった。

4. 共同研究の意義

玄白のあっさり書いていることであるが、昼の会合で、同志の諸君と長時間にわたって会読して訳語を見出し、意味の理解が得られたことを「解するところ」（p. 42）、あるいは「解せしところ」（p. 48）という表現にしている。そのわかった点を持ち帰って、帰宅後玄白が一人で、昼に同志たちと理解しあったところに従って原稿にする。これを「その夜翻訳して草稿を立て」（p. 42）とか「その夜宿に帰りて直ちに翻訳し」（p. 48）と書いている。

昼の集団思考のところは「解せしところ」という表現、夜一人で頑張った点は、「夜宿に帰りて直ちに翻訳し」という表現に言い換えて区別している。この点も注目しなければならない。

昼の会読では、一つの言葉とか文章をめぐって議論百出、考えあぐねてため息だけというような中から、彷彿として訳語を見出し、決定するというにぎやかな集団思考作業である。ところが、その了解点を持ち帰って、その日の夜のうちに翻訳の草稿を書き上げるという作業、これは杉田玄白が一人で、孤独に打ち勝って頑張り通した作業であった。

翻訳作業というが、この作業は実は漢文に仕立てていたのである。したがって、昼の集団思考はオランダ

語から日本語として理解するという点までであった。その理解点を持ち帰って、玄白が一人で漢文にまで仕立て上げる。この漢文に仕立て上げるというところまでを、玄白は「翻訳」と言っているのであり、理解するという昼の段階までのことを「翻訳」とはいっていない。これは注目すべき点である。

そのような翻訳原稿を作成し、次の会合にその下書きの原稿を持参、同志の面々に見せ協議する。さらに手を加えるなり、修正するなりし、また原稿を作成し直していく。そういうことを繰り返したのである。議論が空回りするということが、なかった。ここが最大のポイントである。それがとりもなおさず、1年半の短期間に、ゼロから出発した難解な作業がほぼ完成を見た秘密であると思われる。

杉田玄白は、毎回次から次へと、その先へその先へと急いだ。あまりにも玄白が急ぎすぎるので、同志の面々は玄白を笑ったという。そこで玄白がいうには、「およそ男子たるものは、草木とともに朽ち果てるものではない。あなたがたは健康で年も若いが、私は病気がちで、年もとっている。ゆくゆくこの蘭学が大成するときには、とても巡り合うことはできないであろう。人の生死はあらかじめ定めがたいものである。人に先だって事を起こす者は人をおさえ、人に遅れて手をつける者は人におさえられるといわれている。だから私は急いでいるのである。諸君が事業の完成をみる日には、私は地下に眠る人となって、草葉の陰からその成果を見ていることだろう」（p. 48）と弁明したという。それで、若い桂川甫周は、これを大いに笑って、杉田玄白のことを「草葉の蔭」とあだ名をつけたという。そういうあだ名をつけられても、玄白は頑張り通し、その訳読の推進に努めたのである。

集団思考で威力を発揮する面と、それを受けて一人で孤独に打ち勝って支えなければならない個人の役割とをよくわきまえて、この難事業に取りかかっているところが見事である。

さて、杉田玄白は『解体新書』が、日本ではじめての西洋医学書の翻訳であると思い込んでいた。玄白はそのことを『蘭学事始』の随所で書いている。しかし、『解体新書』の出版は、決して日本で初めてのオランダ書の翻訳ではなかった。それにもかかわらず、『解体新書』の出版は、それに先立つすべての翻訳や出版と異なり、日本の医学界はもちろん、学問全体の方法をも一変してしまうほどの大きな役割を果たした。それがどういう点にあるのか。引き続き『蘭学事始』を検討したい。

玄白は、「もしこの世に、良沢という人がいなかったら、この蘭学の道は開けなかったであろう。また一方、私のような大雑把な人間がいなければ、此の道はこれほどまでにすみやかに開けなかったであろう。これもまた天の助けというものであろう」（p. 52）といっている。彼らは、共同研究によって共通の学問の方法を生み出していった。クルムスの『ターヘル・アナトミア』を翻訳するだけでは満足せずに、この解剖書に書いてある説が正しいかどうかを、他の西洋解剖書を読んで批判的に調べてみる、というのはその一つである。こうして、ただ単に一冊の西洋解剖書の翻訳が世に出たということだけでなく、江戸に蘭学者たちの集団という一つの「学問の世界」が生まれた。学問は、世間の常識と戦わなければならない。

「このようにして江戸において、この学問が開始され、『腑分け』と言い古されてきたことを新しく『解体』と訳名した。かつ、仲間うちから、誰いうともなく『蘭学』という新名を唱えだし、わが日本全国に自然と通称となるようになっていった。これこそ蘭学が今日のように隆盛となるそもそもの始めであった」といっている（pp. 42－43）。

これまでの説明で、『解体新書』は日本で初めてのオランダ書の翻訳ではなかったのに、なぜそれまでのオランダ書の翻訳とは異なり、日本の学問にとって大きな意味を持ったのか、ということが明らかになった。『解体新書』は、西洋の解剖学の内容を正確に紹介するとともに、学問とはこういうものでなくてはならないという学問の方法論と、実際の学問研究の場としての社中を示したのである。

共同研究は、現代のように学問のスケールが大規模になっている時代には不可欠である。共同研究をし、そこで討論する。これこそ、現代人の我々が『蘭学事始』から学ぶことのできる最も重要なことではないであろうか。

5. 儒学と蘭学の関係

玄白は『蘭学事始』において、一つの問題提起をしている。それは、儒学と蘭学との関係である。「そもそもの初めを思い起こしてみるに、昔、わたしたち仲間2、3人で、ふとこの蘭学に志をおこしたことであったが、はや五十年近くもたってしまった。今ごろ、こんなにまでなるとは、ついぞ思ってもいないことであったが、不思議にも盛んになったことである」（p.

11）という。

また、「漢学は、中古のころ、遣唐使というものを中国へ遣わされたり、あるいは、すぐれた僧侶などを留学させたりして、直接あちらの国の人について学ばせ、帰国の後は、貴賤上下の人びとの教導のためになさったことなので、しだいに盛んになったのはもっとものことである」（同前）という。そして、「この蘭学ばかりはそのようなことはされなかった。それにもかかわらず、このように盛んになったのはどうしてか」（同前）という。これは、『蘭学事始』上巻の書き出しの文章である。玄白は、蘭学がなぜこのように盛んになったのかという問題から出発し、蘭学の歴史を書いている。玄白自身の解答は、次のようであった。

Ⅰ．医学のことは、その教えがすべて実地に基づくことを第一とするため、かえって理解が早い。

Ⅱ．学ぼうとすることが目新しく、何か変わった治療術であるかのように世間の人びとが思っているからか、狡賢い連中が売名として名を広め、利益を得ようとするために広まるのか（pp. 11－12参照）。

この解答のうち、Ⅱは狡賢い人であり、蘭学の発達にとって本質的なことではない。Ⅰも、医学のことならば、漢学にだって漢方医があるのだから、漢学と比べた蘭学の特色とはいえない。玄白もこの解答では不十分と考えたようで、下巻でもう一度この問題に立ち返り、およそ次のようにいっている。

ⅰ．漢学は文章を飾った記載であったから、その開け方が遅く、蘭学は事実をありのままに辞書に記しているものであるから、その受け取り方がはやく、開け方もはやかった。

ⅱ．それとも実は、漢学によって人びとの知識見聞が開けた後に蘭学が出てきたので、このようにすみやかに開けたのであるか。

結局どちらか「知ることはできない」（pp. 54－55参照）と書いている。このⅱの問題を考えてみよう。

全く何の知識もないところに、いきなりヨーロッパの学問が入ってきたら、人々はそれを少しも理解することができないであろう。蘭学が発達したのは、それに見合ったかなり水準の高い漢学＝儒学が発達していたからである。すべて、外から入ってきた思想は、それまで日本にあった思想との関わり合いの中でとらえられる。この関係を考えることは、今日でも次々に紹介される外国の思想を、日本人がどのようにして自分自身のものとするかが大きな課題となっているだけに、大事なことである。

6. おわりに

杉田玄白は、自分たちの学問も意義を「かえすがえす私はことのほかうれしい。この学問の道が開けたならば、百年・千年の、後々の医者が真の技術を体得して、人びとの生命を救おうという広大な福益があるだろうと、まさに手舞い足おどるよろこびをおさえきれない。私は、幸いにも天寿を長く授かって、この学問の開けかかった最初からよく知っていて、今のように、このように盛んになった姿を見ることのできることは、我が身に備わった幸いであるとばかりはいうべきではない」（p. 69）といっている。

この大事業について注目すべきことは、会読の面々は、オランダ語の「学習」と翻訳という「仕事」を同時進行させていたことであった。教育を受けてから、就職、仕事をするという、現代人のプロセスとこれが異なる点である。「学習」と「仕事」の同時進行、この点からも足並みが揃わなければ、「会」は成り立たない。そこに張りつめた切迫感が生ずる。

明確な目的・目標を持つと、人はかなり困難なことや無謀と思えることでも、活路を見つけていけるものであることが、まざまざと見せつけられる。この点にこそ、福沢諭吉が感動したと思われる。これは、現代人にとっても必要とされることの一つであろう。

文　献

1）『蘭学事始』の写本は、現在まで14本が報告されており、書名も①蘭東事始、②和蘭事始、③蘭学事始の三種があるという。

杉本つとむ：知の冒険者たち―『蘭学事始』を読む，p. 233－255（八坂書房，1994）

2）その様子は、次のようであったという。

福沢諭吉が友人たちと『蘭学事始』を読みすすめて、「まづ、かのターヘル・アナトミアの書にうち向ひしに、誠に艪舵なき船の大海に乗り出だせしが如く、茫洋として寄るべきかたなく、ただあきれにあきれて居たるまでなり」。この一段に至ると、「先人の苦心」を察し、その「剛勇」に驚き、その「誠意誠心」に感じて、「感極りて泣かざるはなし」といっている。

片桐一男：蘭学事始とその時代，p. 6（NHK出版，1997）

3）『蘭学事始』からの引用は、杉田玄白：蘭学事始，緒方富雄校注（岩波書店，1983）を現代語に訳し、頁数を本文中に括弧に入れて示す。